

はじめに

—— 谷口敏郎先生のこと ——

木 村 俊 夫

同志社が、いよいよ今年、創立百周年を迎えることになったことは、大変うれしいことであるが、われわれはその長かった歴史を振り返るにつけても、この同志社の教学を支えてきた実に多くの先覚の献身的な努力に思いを致すべきであろう。最近のその一つの典型が、谷口敏郎先生である。先生のご退職を記念して、本誌を刊行するに当って、先生の学徳を称えて、ここに一文を草する。これを敢えてする私自身の未熟と僭越を深くおそれながら。

先生は全くの同志社ボーイである。明治39年11月30日、京都市のど真中、明倫学区でのお生まれであるが、先生と同志社との結びつきは、早くも大正10年にはじまる。この年、先生は同志社中学に入学された。今から算えて55年前のことである。従って先生は、同志社の歴史百年のうち、その半ば以上に参加されたことになる。ここの4年を修了された先生は、ひき続き、同志社大学予科に進まれ、更に大学の文学部英文学科に学ばれ、昭和5年3月に卒業された。人格、能力に高い評価をうけられた先生は、文学部助手として大学に残られることになった。

3年間助手を勤められた先生は、昭和8年3月に、一度びは同志社を離れられた。以後およそ10年ほどは、京都市内の旧制中学（京都商業と市立第一工業）で教鞭をとられている。しかし同志社は再び先生をよび戻した。それはあの敗戦の翌年、昭和21年春のことである。こうして先生は、戦後の同志社教学の復興に、そのほとんど当初から、重要な一翼をになわれることになったのである。まず同志社外事専門学校教授として、次いで昭和23年からは、同志社大学教養学部教授として、更に続いて昭和26年からは、同志社大学文

学部教授として活躍され、以後ずっと昭和49年3月まで、実に熱心に研究と教育に献身された。昭和36年からは、大学院（文学研究科英文学専攻）の方もご担当になっていた。

しかし大阪学院大学がその外国語学部に、英語科を新設するに当り、その陣容充実のため、先生の来任を強く希望されたので、われわれは先生のご転出を思いきって容認せざるを得なくなった。先生は49年4月からは、大阪学院大学の教授であり、英語科の主任教授である。こうして本務校を他に持たれることになったものの、本学英文学科には、ひき続き嘱託講師としてはあるが、学科の運営にご協力いただいている。

前夫人が先年亡くなられるというご不幸があったが、その後ご再婚、姓も木口から、元の谷口に戻られ、今は又むつまじい家庭をお持ちになっている。そして下鴨にお住いのこともかわらず、依然かくしゃくとしてご活躍であることはうれしい。

先生のご専攻はアメリカ文学である。昭和41年にしばらく外遊された時にも、その目的は、ホイットマン、ヘミングウェイの研究のためであり、また最近では一夏を利用して、スタインベックの研究調査のため、再びアメリカに渡っておられる。従って長い期間にわたってご担当になった科目にも、年度によっては、英作文、英語音声学、英語科教育実習などを含む中で、アメリカ文学関係の科目の比重が重い。わけてもホイットマンがその中心にくる。

先生の長年にわたるご研究もホイットマンを軸に発展してきたといえる。先生は、一時は、イギリス17世紀の王制復古期劇の研究（「悲劇に於けるドライデン」昭7、同志社文学、「喜劇に於けるコングリヴ」昭8、同志社文学）もされ、また戦後すぐには、英文法、英作文の著述（「正則英文法」昭22、表現社、「高等英作文」昭23、表現社）もなさっており、それに英文、和文両様の翻訳、英文テキストの編註もいくつかされている。それに書評や、口頭で発表された研究を加えると、かなり長いリストができ上がるが、ホイットマンに関するものが、量的にも多く、一番重要であると思われる。

「文芸批評態度管見」昭16, 主流6号

「英文学に於ける近代リアリズムの形成—主として小説の一—」昭27, 人文学8号

「青年期のホイットマン」昭28, 主流16号

「ホイットマンの一考察—ソウルをめぐって」昭30, 人文学18号

「Whitman の一考察—彼の神秘性と科学性—」昭35, 人文学48号

「Whitman and Lincoln」昭38, 上野直蔵博士還暦記念論文集

「Whitman の禪的考察」昭43, 人文学108号

「Whitman が Emerson から得た思想」昭48, 同志社大学英語英文学研究5号

など、先生が発表されてきた論文題目の推移にもよくこのことがあらわれている。今後更に続々と、充実したご研究の実ことを期待するが、ホイットマンについて、わけても、以上の論文題名にもみられる、エマソン—ソウル—神秘性—禪と結びつく、先生が一番関心の深いと思われる問題についての、先生の深い思索の跡を、更にわれわれにお教えいただきたいものである。

先生は、同志社大学英文学会、人文学会はいうに及ばず、日本英文学会、時事英語学会、アメリカ文学会などに所属しておられるが、わけてもアメリカ文学会においては、関西支部の中心的存在として、その運営にたずさわり、わが国における戦後のアメリカ文学研究の深化に大きく寄与されたことをつけ加えておきたい。

私は先生が、「おい」とか、「ころ」とかいわれたのを聞いたことがない。男子学生には「君」づけであるようであるが、私や、私よりずっと年少の後輩に対しても、常に、「先生」や「さん」がよびかけに使われている。しかもその語調は、いつも静かで、やさしい。私は先生ほど謙譲で、柔和である方をあまり知らない。私のはじめに先生にお目にかかった時、先生の鼻下にちょびひげをみて、この先生はこわい人、と愚かにも速断したことを覚えて

いる。つい先日のことのように憶いだされるが、実は今から30年も前、外事専門学校教授室（徳照館にあった）でのことであった。先生のアメリカ文学関係のゼミには、いつも登録が多かったが、それも先生の円満なお人柄が、学生をひきつけたからであろう。先生に親しく教えをうけた学生の数はおびただしいものであるが、かれらに及んだ先生のこのお人柄の感化も実に貴重である。

趣味の広い先生は、洋画をよくし、園芸を好み、カメラを愛し、そして自然、大宇宙の神秘について語られることが多い。そんなことどもについて、閑談させていただく機会がへったことは寂しい。先生の弾かれるバイオリンを私はちょっとしか聞いていない。いつかまた聞かせていただきたいものである。宴席で聞いた「上海帰りのリル」がなつかしい。また聞かせていただきたいものである。

そして何よりも、先生が、益々お元気で、研究と教育の天職に精励されることを心から祈る。